

**観光・防災機能に着目したコロナ禍に
おける道の駅の役割の多様化
—もっくる新城と道の駅とよはしに注目して—
愛知大学地域政策学部地域政策学科
まちづくりコース4年 松井亜詠**

1. 研究背景と目的

道の駅が誕生して約四半世紀が経ち、我々の生活において道の駅が身近な存在となってきた。そうした中、国土交通省では2020～2025年を道の駅の「第3ステージ」とし、『地方創生・観光を加速する拠点』及び『ネットワーク化で活力ある地域デザインにも貢献』の実現を目指している。そこで本研究では、目的地化しつつある道の駅がどれほど地域に影響を及ぼす存在であるのかについて、国の基本コンセプトに示された情報発信機能と地域連携機能の2つに着目し、観光と防災の視点から明らかにすることを目的とする。

2. 研究方法

2-1 道の駅と観光地の立地分析

GIS（地理情報システム）を用い、道の駅「とよはし」と「もっくる新城」から各観光地までの距離を計測した。また、大学生88名を対象とするアンケート調査を行い、若者の道の駅へのイメージ、対象の道の駅に訪問した目的や重視するポイントなどについての傾向を分析した。

2-2 道の駅と防災に関する分析

「防災道の駅」とは何か、両駅の防災機能に関する取り組みについて聞き取り調査を行った。また、GISを用いて豊橋市と新城市の道の駅の立地状況やインフラ施設までの距離を分析した。

3. 道の駅と観光

道の駅を「観光地」ととらえる学生は

81.8%であったのに対し、実際に道の駅を目的として旅行をしたことがある学生はわずか17%であり、研究対象とした両駅には、約35%の学生しか行ったことがないことが分かった。一方、GISの分析結果により、道の駅の周辺には博物館・施設の観光地が多いことが明らかとなった。

4. 道の駅と防災

「とよはし」は、大規模災害時等の広域的な復旧・復興活動拠点となる「防災道の駅」に国から選定されていた。またGIS分析の結果、半径1km以内にインフラ施設が少ないことが分かった。「もっくる新城」は、市全体の最大傾斜角度が大きいため、道の駅周辺の傾斜角度も大きいことが分かった。

5. 考察と道の駅の今後の展望

両駅のポジティブな観光に対する地域性の共通点として、観光地が周辺に多く存在していることや学生が観光目的で訪れた道の駅であることが挙げられる。また特産品や手軽に食べられる軽食が数多く揃っている。

対して、懸念される共通点としては、学生からの認知度が低いことである。防災に関しては、両駅ともに防災備蓄倉庫に道の駅の観光客対象の物資は備蓄されておらず、防災訓練も防災拠点として定期的には行われていなかったことである。

今後の展望について、観光機能に関しては、道の駅が観光地との橋渡し役となるように、また大学生など若者の客層を取り入れるための取り組みを強化していく必要があると考えられる。一方、南海トラフ巨大地震にむけた、防災機能に関して、道の駅利用者への防災備蓄倉庫の強化と市全体での防災意識の向上、そして綿密な防災訓練が重要となると考えられる。